

故郷に恥じない人間になりたい 黒田 善太郎

文房具のkokyo創業者

近畿富山県人会を結成

富山大学に黒田講堂を寄付

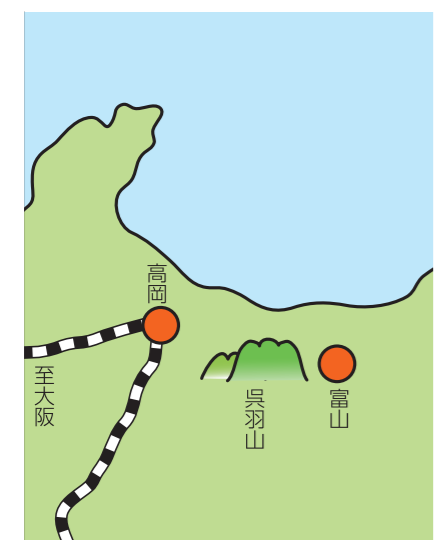


1879 (明治12) 年2月7日—1966 (昭和41) 年3月27日

12歳で父親と死別

善太郎は石川県鉄砲町（現富山市）でマッチ製造業を営む黒田屋の長男として生まれました。12歳のときに父親が病死したため、黒田家は共同経営者にマッチ工場

を譲り、善太郎は母親の実家の雑穀問屋茶ノ木屋へ働きに出ることになりました。仕事は下働きでしたが、一言も不平を言わずに一生懸命に仕事をしました。



商人として成功し、郷土のために尽くしたい

善太郎は15歳で独立し、ニワトリの卵を扱う仲買商をしながら商売について勉強しました。商人として修業するには都会へ出なければだめだと考えた善太郎は、大阪で自分を鍛えることにしました。これまでの客を世話になった雑穀問屋に紹介し、富山に残る家族が困ったときに助けてくれるよう頼んで高岡駅から大阪へ出発しました。1898 (明治31)年、善太郎が19歳の年でした。

当時は北陸線が高岡駅までしか来ておらず、善太郎は富山から呉羽山まで徒歩で、呉羽峠から人力車で高岡へ行くことになっていました。呉羽山の峠には母親、本家の老母、親戚の人たちがたくさん来て、善太郎を見送りました。

母親たちは「善太郎、しっかりやってこられ、立派なもんになられ」と手を振って叫びながら見送ってくれました。

紙を扱う仕事に出会い独立

大阪では親戚の運送店やマッチを製造する工場などで働きました。気持ちが落ち込むと、大阪の梅田駅へ行き、時刻表に「富山」の文字を探しました。1899 (明治32)年には鉄道が富山まで開通し、善太郎は時刻表に「富山」の文字を見つけ、勇気づけられました。善太郎は1901 (明治34)年、大福帳*式和帳の表紙を作っていた大阪市内の小林表紙店で働くこと

になりました。善太郎は生き生きと仕事に励みましたが、単純な作業でしたが、打ち込んで取り組んでみると愛着がわき、研究の余地もあったのです。

そしてお金も貯まったので、1905 (明治38)年、市内の家を借りて和帳の表紙屋「黒田表紙店」を開業して独立しました。



創業後10年ほどたったころの黒田表紙店の店舗

*大福帳【だいふくちょう】江戸時代から明治時代にかけて、商店が商売の記録に使っていた帳面。和紙を紐で綴じた帳面に書き込みました。

事業に成功し故郷へ恩返し

最初は表紙だけでしたが、間もなく和帳の製造も始め、帳簿本体と表紙の一貫生産を行って商売は繁盛しました。1913 (大正2)年ごろには、他社に先駆けて洋式帳簿の製造に乗り出しました。さらに、伝票仕切類、複写簿、便せんなど製品の種類を増やしていきました。製品はどれも品質が高く、使うのに便利だったため、国内だけでなく海外でも好評を得ました。

善太郎は故郷への熱い思いを社名などにも込めています。1914 (大正3)年に店名を「黒田国光堂」とし、後に商標を「国誉」に決めました。「国」は富山県のことであり、「志」を立てて故郷を出たからには、故郷に恥じない人間になりたい、そうすれば『国の光』『国の誉れ』になるだろう」という善太郎の信念によるものです。

善太郎はこの信念を富山県への恩返し形の形で表し、1934 (昭和9)

年に近畿富山県人会を組織して会長に就いただけでなく、近畿富山会館の建設を呼びかけて理事長に就任したほか、富山大学に講堂（黒田講堂）を寄付しました。

善太郎が創業した会社は、文房具・事務用品の総合メーカー「kokyo」として発展を続けています。



和式の帳簿 (和帳)



現在の富山大学黒田講堂



洋式帳簿の製本場

夢や志をかなえたポイント

- 恵まれにくい環境に負けないでがんばる
- 生涯打ち込める仕事を見つける
- 故郷を愛する気持ちを失わない

豆知識 kokyoを代表するヒット商品「キャンパスノート」は、学生を中心に広く愛されるブランドとして成長し、販売数の累積は、1975 (昭和50)年の発売から現在まで17億冊に上っています。

1879 (明治12)	0歳
石川県鉄砲町に生まれる	
1891 (明治24)	12歳
雑穀問屋茶ノ木屋へ奉公に出る	
1894 (明治27)	15歳
茶ノ木屋から独立	
1898 (明治31)	19歳
大阪の運送店やマッチ工場などで働く	
1901 (明治34)	22歳
小林表紙店で奉公	
1905 (明治38)	26歳
和帳の表紙屋を開業	
1913 (大正2)	34歳
洋式帳簿の生産を始める	
1914 (大正3)	35歳
店名を黒田国光堂とする	
1917 (大正6)	38歳
商標を「国誉」にする	
1957 (昭和32)	78歳
富山大学に黒田講堂を寄付する	
1961 (昭和36)	82歳
社名をkokyoにする	
1966 (昭和41)	87歳
亡くなる。勲四等瑞宝章を受章	

コラム 天職に一生を打ち込めと説いた善太郎

善太郎は職業について次のように語っています。

「人間というものは、すっぱだかで生まれてきて、両親や先生、社会のおかげで成長し、やがて一つの仕事を与えられる。それが天から与えられた天職である。(中略) その仕事に一生を打ちこんで、生命のあらん限り、全知全能をしばって、その天職を守りぬかねばならない」。



孫たちに囲まれた善太郎 (前列左から二人目)